

# 文化財調査報告書

調査日：平成24年8月15日

- 1 種 別 無形民俗文化財
- 2 名 称 椎津のカラダミ
- 3 員 数 ー
- 4 指定年月日 平成19年3月16日
- 5 伝 承 地 市原市椎津
- 6 伝 承 者 椎津青年会

## 7 現状及び環境

毎年8月15日に行われている行事日にあわせ、現状と若干の聞き取り調査を実施した。日程は、現在も8月15日、すなわち盆の送り日に行われている。近年、各地の祭り・行事の祭日が社会変化に伴い、祭礼日に近い土・日曜日に変更されている現状において、異例ともいえるだろう。また、行事の担い手である椎津青年会は、今後も祭日はもちろんのこと、この伝統的な行事を積極的に保持していきたいという意向を示している。しかも、近年は青年会を脱会した50歳以上の先輩連中が友志会という組織を結成し、この会の有志が積極的に手伝っている。したがって、一般的な後継者不足というマイナス要因が見当たらないので、この行事は、当分の間は保持されていくのではなかろうか。

「椎津のカラダミ」のカラダミは、カラダビとかジャラボコとも称される。その由来は椎津城主椎津小太郎義昌を偲んで仮の葬式を営んだとか、逃がすためにニセの葬式で敵を欺いたと伝えられている。

一方、1961年（昭和36）に海岸が埋め立てられる頃までは、この日の夕方に漁民の男女が集まって、水難者や横死者のための施餓鬼供養を営み、瑞安寺住職の読経だけでなく、婦人の数珠廻しも行われていたという伝承もある。また、万燈は出羽三山信仰の梵天供養に出る山車にも通じているなど、この行事には生きた人を棺に入れて棺を担ぐ仮の葬式の行列とだけではなく、類例のない貴重な民俗文化がいくつも複合している背景を窺うことができよう。

行事内容は、「万燈（山車）作り」、「団子もらい」、「万燈行列」、「カラダミ行列」の四構成から成っている。ここで、行事を簡単に紹介する。

「万燈作り」は椎津青年会が主体となって、朝からはじまる。万燈（山車）の木組みに切子提灯、バレン、幕、造花などを飾りつけ、一番上に小太郎の像を立てる。小

太郎像は張子からマネキン人形になっている。バレンに使用する竹（真竹）は竹店から購入する。新盆の家から貰う切子提灯は、最近では各家の飾りが少ないため数が減っている。万燈の明かりは、積んだ発電機からとっている。

「団子もらい」に登場するコジキボウズとコジキ（現地呼称）の役には青年会のメンバーから選ばれた二名がつとめ、コジキ役がフゴ（背負い籠）を背負い、コジキボウズ役が鉦を打ちながら各家を廻って、供物などを集める。現在は、団子などの供物が金銭に変わってきている。このコジキボウズとコジキは、万燈やカラダミの行列を先導する役割を担っている。

夕方の6時に、瑞安寺（浄土宗）に関係者が集まり、本堂で住職の読経などがあり、30分くらい経過すると境内の文殊堂前にある小太郎の墓前に移動し、小太郎の位牌を供え、読経後、万燈が置かれている場所（出発地）に行く。青年会長は持参した位牌を明かりの灯った万燈の上部にのせると、僧が読経を行う。

7時に「万燈行列」がはじまり、万燈（山車）は瑞安寺、八坂神社などを通して姉崎小学校脇まで曳かれて行く。万燈の中には友志会の者が乗り込み、ドウコ（一斗缶）を打つ。子どもがドウコを打つこともあった。万燈の前には小学生六人がリコーダーを吹いて歩く。その前方をネリオドリと称して婦人会が踊りながら歩き、その両側に山車を曳く綱があり、それぞれに100名ほどの子どもや老若男女が分かれて曳いていく。その際、「そらやせ、よっこらせ、じゃらぼこ、じゃらぼん、おんじゃんじゃん」と囃しながら練り歩く。途中から、思い思いの仮装をした者が加わる。コジキボウズとコジキは行列の前後を行き来している。山車はテコ棒で舵取りをし、電線を避けながら進んで行くが、道路ではバスや自動車などを止めたり、山車を止めたりして進んで行く。小学校の脇に到着し明かりが一斉に消されると、見物人は万燈についていたバレンや花を取って貰い、家に持ち帰る。これを門口に挿しておくとは魔除けになるといわれている。

その頃（8時30分頃）、メインである「カラダミ行列」がはじまる。小太郎の両親の墓につながる横道の途中に置かれた棺（寝棺）の中へ青年会長もしくは経験者が入り、頬被りをした六人の男が担ぐ。竹を割ってつくった門、五色幡（一對）、紙の位牌、杖、小太郎の位牌、施主花、天蓋、棺の順番で、「おっとうが死んじゃった、おっかあが死んじゃったよう、わあわあ」と叫びながら駆け足で、コジキボウズとコジキに先導されて一斉に瑞安寺まで走る。途中、八坂神社で櫓の周囲を左廻り（時計と反対廻り）に三周し、最後に竹を割ってつくった門をくぐって、瑞安寺の境内に入り、そこで同様に三周し、寺の裏に走り込む（9時）。松明が焚かれている小太郎の墓前に集まった人びとが線香を供えて拝んだ後、梨を一つ貰って帰る。

## 8 芸態の変化

「椎津のカラダミ」は、第二次世界大戦（1940年前後）の時期まで、当時の椎津の青年団を中心に伝承されていた。しかし、終戦（1945年）前後から数年休止の状態にあったが、その後昭和30年代（1955－1964年）後半まで椎津の消防団によって営まれた。その後1971年（昭和46）まで中断されていたが、1972年に椎津の有志によって復活し、翌年椎津青年会が結成されてから今日に至っている。

る。2回の休止を経験しているので、かつての芸態を詳細に把握できないが、行事そのものは40年以上も大きな変化もなく、保持されてきたといえよう。今後は、行事に使用される万燈（山車）・位牌・棺などの道具類の保持にも留意する必要性を指摘しておきたい。

## 9 取り扱い上の留意事項

特になし

## 10 公開にあたっての取り扱いについて

特になし

## 11 その他参考にすべき事項（これまでに作成された記録）

- (1) 松田 章「椎津『カラダミ』見聞記」1965年 『房総文化』第7号  
房総文化研究会編
- (2) 『市原の年中行事』 1965年 市原市教育委員会編・発行
- (3) 秋山笑子「市原市椎津のカラダミ」 2002年 『千葉県祭り・行事調査報告書』 千葉県教育委員会編発行
- (4) 大島建彦「椎津のカラダミ～千葉県市原市椎津～」 2005年 『西郊民俗』第190号 西郊民俗談話会

## 椎津のカラダミ

万燈作り



団子もらい



万燈の行列



カラダミの行列

